

地域コモンズとしての小規模ワイナリーの形成過程について

—山梨県甲州市勝沼の共同醸造所を対象として—

THE FORMATION OF SMALL-SCALE WINERIES AS LOCAL COMMONS

-A case study of communal brewery in Katsunuma, Koshu city, Yamanashi -

佐倉研究室 22w5014A 勅使河原大誠

Nagano Lab. 16T7001A Taro SHINSHU

キーワード：
小規模ワイナリー、地域コモンズ、文化的景観、持続可能性

Keywords:
Small-scale wineries, local commons, cultural landscape, sustainability

Considering production system, relationship with grape farmers and position in city space, small-scale wineries in Katsunuma area had considered to be a part of local common space. This thesis aims to analyze the formation of common space in winery, by researching methods of scaling up, forward view of the work space from a visitors perspective, usage, and comparison with shared space in new local small-wineries.

1. 序

1-1 研究の背景と目的

現代の日本の都市生活において、食をはじめとする生活基盤を支える役割は農村や地方が担い都市部と明確に区切られてきた。その弊害として大規模地震によって流通網が機能しなくなった場合、都市生活の脆弱さが露呈した。加えて縮小社会が現実となりつつある現在、地域の持続可能性は重要なテーマとなりつつある。木下(2012)はアイデンティティが持続可能性に大きく貢献する事を示し^①、広井(2011)はコミュニティと持続可能性は不可分の関係にあると述べ、^②コミュニティを醸成する重要な空間として地域のコモン空間を挙げる。地域にとってのコモンズとは地域社会により醸成された地域資源や空間をさすもので、地域に共通する利益を目的にすることで維持、管理されることにより成り立つ空間である。

日本の伝統的なコミュニティの空間について宮陽らは、日本において入会地を典型例とし、共同体による維持や管理が形成に重要であると述べる。^③木村(2014)は、共同体に所属する主体によって形成される地域コモンズの持続可能性に寄与し、地域のアイデンティティが表出する場としてのポテンシャルを与えると指摘する。^④地域コモンズはコミュニティの関係の中で長い時間をかけて形成されるものであり、空間そのものが地域資源とみなされる。

しかし現代では、従来のような住民同士の関係性が希薄化し、都市部を中心に大規模再開発が進められることにより地域のコモンの空間が街から消失している。また一次産業の工業化に伴い少子高齢化や後継者不足が不足し、農村部のコミュニティも希薄化している。そこでこれらの産業を地域に開くことで、地域コミュニティの強化につながる取り組みがなされている。

コモン空間を形成しコミュニティとの関係を強める試みとしては、道路や線路などのインフラ空間や空地を地域のための空間を再利用する方法がある。例えば創作活動の拠点化をすることで地域を活性化させる事例がみられる。また農村部に限らず、都市縮小によって発生した空地を地域が共同で管理する試みがみられる。

これについて陣内信秀、恵谷浩子らはこれらのコミュニティの関

係性を強める空間を形成するための論点として、都市と周辺の農村や田園を経済的・文化的につなげて地域のアイデンティティを見出す視点が必要だと指摘する。^①特に、食を通して地域への視点は地域の自治に重要だと述べており、地形や土壌などの自然条件や歴史、文化との関わりが深いものとして食の文化的景観を挙げている。

ワイナリーは農業と食の生産の空間が一体となった場である。しかし都市史の観点から見ると、ワイナリーはワインの生産を行うだけでなく地域の新たなイメージを形成している。^②そのため近年は、ワイナリーを利用した地域拠点の計画がみられる。新建築によると2010年以前に掲載されたワイナリーの機能を持った事例が1件であったのに対し、2015年から2024年の期間に4事例が紹介されており、そのいずれも地域との連続性を意識したデザインである。^③

本研究の目的はワイナリーと地域コモンズの関係性を明らかにし、ワイナリーの生産空間が与えた影響を分析することである。近代化が進んだワイナリーでは、生産効率の向上を目的として大規模化がし、品質の洗練を目指して材料となる葡萄を特定の農家と契約して生産する。そのため地域のコミュニティにおいて維持され、共有されるワイナリーはまれである。また、小規模な食の生産拠点が形成する地域とのつながりを分析する手法は、地域コモンズとしてのワイナリーが地域空間にもたらす変容を分析するものであり、他地域における食の産業にも応用可能である。

本研究の対象は、山梨県甲州市勝沼に点在する小規模ワイナリー群とする。その起源となった「共同醸造所」は、日本にワイン生産の文化がもたらされた最初期に形成された生産組織であり、地域のコミュニティによって醸成されたワイン文化の要因となっている。そこで年間生産量が300kL未満のワイナリーを対象とし、勝沼地域のワイナリーと地域の関係性を分析する。

1-2 研究の位置づけと調査対象

食の生産と地域空間の変容の関連性については、都市計画や農村計画の分野に関連する研究がみられる。現在は海外の先進事例を扱った論文が過半だが、近年の国内事例に関して寺田ら(2023)の都市の構造を規定するインフラ施設の研究がある。^④文化的景観に関する研

究として、川崎(2021)による宇治地域の住空間と文化的景観の応答に関する研究がみられる。ワイナリーに関する文化的景観に関しては甲州市と研究機関により、葡萄栽培とワイン醸造に関する景観の抽出が行われている。4)これに関連して、菊池(2023)による地域の認識に関する研究が見られる。ワイン生産に関わる景観の調査では土壌や気候に関連付けられた構築物として古民家を用いたワイン生産の光景を対象に空間の利用調査が行われたが、伝統的な手法を継承するワイナリーの具体的な空間利用については明らかでない。

対象である勝沼町東部は大菩薩連峰や甲州高尾山など甲府盆地を形成する山が連なり、本地域ではこれらを水源とする日川、鬢櫛川、(岩崎南部を通る川)が合流し、北西へ下る複合扇状地を形成している。1907年、1910年に本地域で発生した日の川の氾濫は粒径の大きな土砂を広範囲にもたらした。⁰本地域は水はけのよい砂礫質の土壌が主だが⁰、この水害は本地域で桑畑に大きな被害をもたらした以前はブドウ栽培が困難であった地域でも栽培を可能にした。もとより勝沼は葡萄の産地や宿場町として知られていたが、戦後は農地改革によって自作農が急増した。養蚕に用いられていた農地が葡萄の生産に用いられたことで本地域の葡萄生産量は急激に増加し、もともと葡萄の名産地として知られていたことから葡萄栽培が本地域を代表する産業となった。また1900年ごろから葡萄の生産量を増やすために、竹や針を用いたぶどう棚を用いた栽培方法が開発され、これは今日地域で見られるぶどう棚の原型となった。さらに高度経済成長期になると幹線道路沿いに多数の観光農園が登場し、高さを上げたぶどう棚(下部に観光バスを停車できる)が現れた。

また一般的な住宅でもぶどう棚を設けるようになり、現在のぶどう棚と住宅が街中に混在する光景が形成されたとされる。⁴甲州市の景観ガイドライン⁰では道路沿いの農園について、色合いや形状に関する模範例が示されている。ワイナリー建築はその模範例となっており、本地域の中でも地域を代表する建築として評価される。



図1 山梨県甲州市地図(国土地理院地図に筆者加筆)



写真1 葡萄畑と住宅地の混在する市街地(筆者撮影)

1-3 研究の構成

本研究では設立当時の共同醸造所の地域との連関に着目し、文献調査やヒアリング、立地分析や仕込み作業時およびそれ以外の日常的な利用の現地調査によって、街並みと生産空間の関係を多方面から調査した。調査はワイナリーの社会的関係の変化を整理する章、ワイナリーが周辺の空間に与えた変化について分析する章、発展によってワイナリーが地域コモンズの空間を内包する過程を分析する章からなる。

2章では前提となる共同醸造所の歴史に着目し、近代化が進む以前の集落におけるワイナリーの役割とその変化を整理する。3章では共同醸造所の生産に関わる設備の近代化を整理し、ワイナリーの製造手法が現在の生産空間と地域の空間に与えている影響を分析する。4章では増改築の過程で余白空間となったアプローチに注目し、3章の調査を基に、用途が複合化する様子を分析する。その結果、道に面する余白空間が現在の地域コモンズとして働くことが明らかになった、そこで5章では勝沼に新設された小規模ワイナリー群の共有空間について、本地域の伝統的な地域コモンズと新たなワイナリーで計画されたコモンズの性質を比較した。本研究では伝統的なワイナリーの生産手法、近年登場した新興ワイナリーの計画手法の違いを比較し、どのように地域の共有空間や広場の利用に影響を与えたかを考察する。特に現代のワイナリーでは伝統的な手法をどのように引継ぎ、変化させたかを考察する。

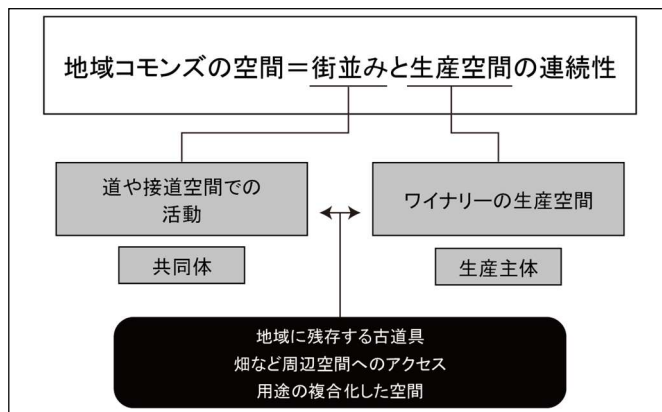


図3 本研究の構成

2 共同醸造所と集落空間の関係性

2.1 勝沼町におけるワイナリーの起源

国内における最古のワイン生産は、1879年に勝沼町祝村にて設立された「大日本山梨葡萄酒会社」の創設が始まりである。その後は収穫量が増加したことで材料に余裕ができ、一般的な農家も醸造が可能になった。ワイン生産の黎明期に主に生産を行っていたのは①日本酒製造を行っていた庄屋や②自前の葡萄で醸造できる農家である。

1915年以降になると、特に葡萄酒の安定した製造法が確立された為個人醸造場が315場から3694場へ急増した。

1940年に酒税法が施行された際に、個人による自家醸造に以前よりも多額の税金がかけられるようになった。税金の回収を簡易にすることや、近隣の住民で葡萄酒醸造組合が設立され、散在していた個人の醸造場が「共同醸造場」に統合された。ワインの副産物である酒石酸が潜水艦のソナーに用いられたため、戦時中も酒石酸の製造目

的として醸造が許可された。この組合が今日の小規模ワイナリーの主な母体となっており、今日まで継承されたワイナリーの多くは戦後に共同作業所が株式会社化して事業を継続している。したがってこの時期のワイナリーの発展は地域社会との協力関係に基づくものであり、後のワイン生産に大きな影響を与えた。

2-2 共同醸造所を由来とするワイナリーの変遷

菊池(1983)⁰の研究によると、1940年代以前の個人による醸造で当時はブドウの生産量も少なく年間の生産量が1KL未満の醸造所が多数存在していた。また一般的な原料は専用に栽培されたものではなく、自身の葡萄畑や知り合いから入手した屑物の葡萄が一般的な材料であった。共同醸造所の設立以降も周辺住民の自家消費が生産の主な目的になっていたが、その後は醸造家の意向次第で利潤目的のワイナリーや生産工場に変化した。その中でも共同醸造所の性格が強い個所では現在も生産量が少ない傾向にある。これらの「共同醸造型ワイナリー」は、現在は住民の共同出資によって株式会社化がなされることで今日まで運営・維持されており、近隣農家の葡萄を用いる。

1955年ごろから共同醸造所の中には周辺農家と共同で醸造所を新たに運営し、利潤を追求するものが現れた。これらは地場資本型醸造所と呼ばれ、品質を洗練させるために材料となる葡萄を契約した農家から得られたものに限定することや、生産の規模を拡大することで近代行い関東をはじめとする地域外に向けた販売や雇用を行う。

さらにワインの製造技術が発展すると年間生産量が1000KL以上を超える大型の工場が地域に参入し、以降は安定した品質を保ちつつ大規模な生産が行われるようになった。これらは既存の醸造所を買収することによって勝沼に進出したとされ、県全体の広範囲にわたる農家から原料を購入する、または輸入で得た原料を用いたワイン製造が特徴とされる。ここではこれらを「工業型醸造所」と呼ぶ。

既存の調査と比較すると、今日のワイナリーの形態は多様化している。1974年以降、先進的なワイナリーが中小規模に向けた育成や技術公開を行う制度が策定されたことで共同醸造所や地場資本型醸造所への技術共有をして品質を向上させるシステムが整った他、数度のワインブームをきっかけとして日本ワインが社会に受容され、小規模ワイナリーへの関心の高まりから県外からの来訪者が増加した。さらに流通や通信の発展によって小中規模のワイナリーが発信しやすくなり、本地域の小規模ワイナリーは地域で生産される葡萄を用いた独自性の高いワインを生産する場所として認識されるようになった。また2003年にワイン産業振興特区が策定されたことで、醸造家が葡萄栽培のための農地を借りるための規制が緩和され、新規参入するワイナリーが現れた。ここではそれを「新興ワイナリー」と呼ぶ。

表1 勝沼のワイン産業に関する年表

1871年 日本初のワイナリー設立	・ 専業の醸造所が3場、個人の醸造所が319場(1915年) ・ 個人の醸造所が3694場に増加(1939年)
1940年 葡萄酒共同組合設立	・ 自家醸造の制限によって醸造場は147場に統合
1974年 ワイン重点指導工場制度策定	・ 中小ワイナリーに対する技術共有が本格化 ・ ワインブームをはじめとする日本ワインの大衆化
2003年 ワイン産業振興特区策定	・ 小規模ワイナリーの新設が増加 ・ ワインツーリズムイベントの定期開催

2-3 共同醸造所の地域社会との関係

農家とワイン生産の密接な関係による管理は、地域の持続可能性を支える基盤として機能している。1890年頃におこった不況の影響で農家が栽培したブドウが大量に余った際は、醸造家4)がワインの増産を行うことで栽培者の葡萄を買い上げた記録が残っている。また同時期に「葡萄酒引用醸成同盟会」を発足され、ワインの日常引用に対する働きかけが行われた。この結果として、現在の自社では日本酒の代わりにワインを用いるなど様々な形で日常生活にワインが取り込まれており現代もこの習慣は続いているとされる。

このように本地域でのワインの製造は地域の農家と醸造家の互助関係によって成り立っていることが示唆され、冷害など農家に被害が出た際のセーフティネットとなった記録が残る。また葡萄の生産が可能であればどのような主体でも生産をすることが可能な状況となっており、一度閉鎖した箇所が再開される、あらたに新設される等によって定期的に新たなワイナリーが設立される基盤が整っており、文化面、社会面の両面で共同醸造所は地域インフラの一面を持っている。

2-3 共同醸造所の地域社会との関係

地域の共有空間と見た場合の共同醸造所の周辺環境、および集落の構造を現代と比較するため、過去と現在の立地について分析した。現代のワイナリーは本地域のワイナリーは市街地を中心として2,3キロ四方の圏内に30箇所以上のワイナリーが分布している。2-2におけるワイナリーの分類に基づいて立地を比較すると、中小規模なワイナリーは町域に分布し、大規模なワイナリーは町域から外れた河岸段丘下の河原沿いやブドウ畑の広がる急斜面地に分布する傾向がみられる。共同醸造所を起源とする共同醸造所型ワイナリーや地場資本型ワイナリーの立地は当時の集住空間内に均一な密度で分布しており、現代ワイナリーと比較して立地傾向が異なる。

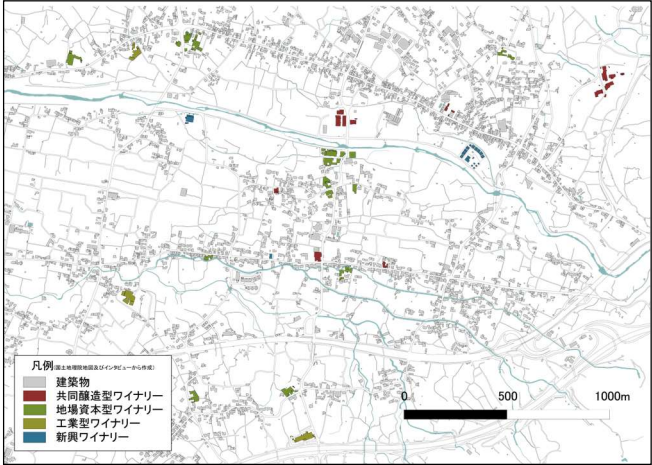


図6 勝沼に立地するワイナリーの分布と種類

そこで共同醸造所の位置と当時の町役場の立地に着目すると、各地域の旧町役場に面する形で共同醸造所が設立されている。周辺の環境に注目すると醸造所が数多く並ぶ旧甲州街道沿いや祝村大道沿いでは旧町役場の隣地には農業協同組合の集荷場が位置している、旧町役場に隣接しないものでは消防団や青年会の集会所、小学校、郵便局や神社等集が隣接している。共同醸造所はそこに建築に隣接する形で立地する。したがって共同醸造地域は自治機能の一部であり、かつて地域コモンズに隣接する建築物であった。

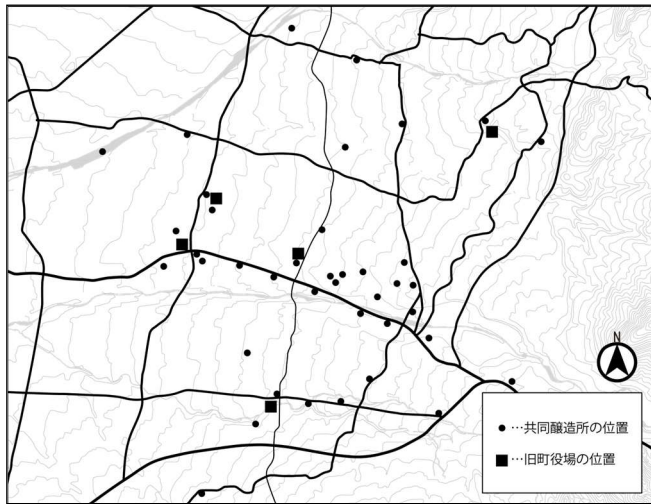


図7 共同醸造所の立地と旧町役場の位置関係

以上から共同醸造所はコモンズに接する公共の機能であったが、今日までのワイナリーにおこった環境の変容や近代化との関係性は明確でない。そこで次章では共同醸造所の生産手法や葡萄畑との関係性に着目し、その変化を調査した。

3 共同醸造所を由来とするワイナリーの生産方式と生産空間の変遷

3-1 ワイン製造の手法と古道具の循環

共同醸造所が設立された当時の共同体との協働関係を調査するため、製造手法を調査した。ワインの工程は古代から現在まで変化せず紀元前1500年前のエジプトの絵にも描かれている。ⁱ⁾しかし品質の洗練や生産の効率化のために、一般的なワイナリーでは機械化が進み、国内のワイン産地では形成時期から機械が用いられた。これに対して共同醸造所では、地域内で必要な設備を手作りで整備し、機械を使わず人力でワイン生産が行われる(写真3)。現代ワイナリーの手法と伝統的な手法では、以下のように用いる道具面の違いがある。

栽培に関しては、一般的なワイナリーでは樹勢を抑えるため垣根を用いた栽培が用いられるのに対し、勝沼地域では広くみられる葡萄農園の特徴として支柱を支えに水平に張り巡らせた針金やコンクリート杭を用いるぶどう棚を用いるのが一般的である。³⁾、自家消費が主目的のワインでは複数種の葡萄を混ぜるため、各種に適した構造物を用いる。



写真3 日本初のワイナリーにおける圧搾の古写真⁶⁾



写真4 エントランスに飾られる道具類(筆者撮影)

機械化された圧搾には規格化された機材を用いるのに対し、人力圧搾ではワイン産業の導入時に参考としたフランスで用いる機材を参考にした道具類を用いる。製造者は地域の木工である場合が多く、

圧力をかける方法や機材はワイナリーの規模や使用する設備によって柔軟に変更される。小規模なワイナリーでは可動式の小型圧搾器が使われる一方で、大規模なものでは専用の圧搾器が使用される。⁵⁾

醸造の段階では一般的なワインの製造に用いられるステンレス製のタンクや木樽ではなく、日本酒生産に用いられるホーロー製タンクを流用する個所がみられる。これは共同醸造所の設立時に酒蔵から譲り受ける、あるいは安価で買い取ることで設置する。また保存の際に空調設備を用いず、地下の安定した気温と地下水による冷却や土蔵の断熱性能を利用している。

これらの道具類は地域内で製造され、譲渡されることによって地域固有の生産空間が形成される。またこれらは利用後も廃棄されることなく各醸造所の文化的象徴として保存される。(表2)この点で、本地域におけるワインの生産工程に関する道具は地域資源としての一面を持つ。

本地域の手法に関する醸造家へのインタビューでは、現地調査で確認できた道具類の違いに加えて圧力をかけないことに対する言及がみられた。このうち圧力に対する言及を行ったワイナリーは急斜面に立地しており、地形との関連が示唆された。これらの醸造所では敷地内部に高低差があり、上から下の空間へと運ばれる形で各工程が設けられている。特に圧搾の段階と醸造タンクに入れる段階に注目すると、重力によって自然と果汁が得られるように配置がなされていた。以上から、急斜面地におけるワイン製造では高低差のある空間を利用した果汁の圧搾方法が独自に開発され、それが後年になって良質な果汁を得られる製造方法として見直された。¹⁰⁾ 斜面地に立地するワイナリーでは重力の活用が空間利用に影響する。

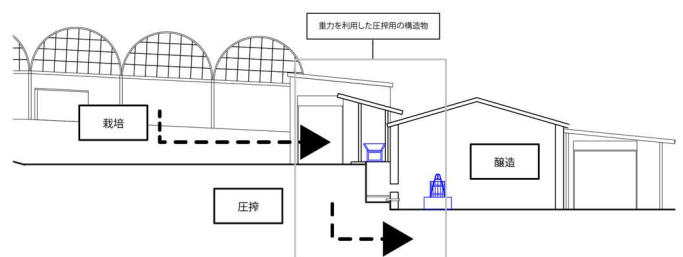


図8 重力を利用した道具類と敷地高低差の配置例

総括すると本地域では人力圧搾をはじめとする手法に歴史的な意義を持っていたが、近年はワイン製造それ自体に意義を見出している。そのため共同醸造所の手法に由来する設備や製造手法が各ワイナリーの象徴として扱われるようになってきている(写真4)。

表2 共同醸造型ワイナリーに配置される古道具類

材料の状態	果実	果汁	葡萄のアルコール	ワイン
機械式製造法				
地域の製造法				

3-2 ワイナリーの発展と解放された生産空間の関係性

2 章で述べた集落内の立地を踏まえて設立当時の生産方法に着目すると、共同醸造所のワイン生産は周辺の町と強い連続性を持っている。一方で今日の醸造所は圧搾所や葡萄畑を非公開にするケースや地域との協働による生産形態を廃止したケースがみられる。

そこで各事例の敷地から地続きになっている葡萄棚（葡萄畑）や周辺の作業空間について、分断の原因となっている物とワイナリー毎の生産手法の関係性を調査した。まずワイナリーのうち、過去に共同醸造所の生産形態をとっていた事例を調査した。その結果、15 事例が当てはまった。（表 3）したがって菊池(1983)の調査と比較すると他の生産形態をとる醸造所の割合が増えていることが確認できる。次に各事例における現在の生産形態を把握するため、2 章で述べた共同醸造所に由来する生産手法（近隣住民の持ち寄りによる自家消費目的製造）の有無と周辺農家との契約による自社農園の有無を調査したところ、半数近くが持ち寄りによる醸造を取りやめ、自社専用畑を持っていた。

そこで共同醸造所の際の本地域の葡萄畑をはじめとする敷地について畑と市街地の空間的な連続性を分析した。まず、表 3 の各事例については各事例の来訪者用の導線上にある物を調査した。その結果、葡萄畑や圧搾所の間には境界となっている物が存在し、表 4 に見られる 4 類型に分類ができた。境界となっている物は①道路等敷地の境界②河川や水路③建築のボリューム④柵などの設置物の 4 種類である。①については平面的配置と合わせて考えた場合、圧搾、ぶどう棚、アプローチが道路を挟んで向かい合わせとなっている物と連続性のない形で異なる敷地に配置されている物の二つがみられた。前者は敷地に連続性がなく（道路 1）後者は敷地間に通された村の主要道を利用するワイナリーが分断されたものである（道路 2）。②ボリュームはエントランスや母屋などの建築物で区切られる型である。③水路はヴォイド空間として、敷地の形状を規定する。④設置物は、畑への進入を拒むために意図的に作られている。

表3 共同醸造所に由来するワイナリーの一覧

項目名	設立年代	主な建築構造	醸造に関する規模拡大の手法	共同醸造所に由来する生産手法の有無	自社専用畑の有無
事例A	1939年	鉄骨造 コンクリートブロック造	醸造所の増改築	○	○
事例B	1940年	RC造 鉄骨造	醸造所の増改築	○	○
事例C	1935年	鉄骨造 木造	醸造所の増改築	○※産家個別の委託による醸造	○
事例D	1941年	木造、RC造 鉄骨造	醸造所の増改築	○	×
事例E	1921年	鉄骨造、 RC造	醸造場の増改築	○	○
事例F	1956年	鉄骨造、 RC造	新築	○	×
事例G	1939年	RC造 鉄骨造	醸造所の増改築	○	×
事例H	1924年	木造 鉄骨造	古民家型	×	○
事例I	1882年	鉄骨造	古民家型	×	○
事例J	1932年	木造 鉄骨造	古民家型	×	○
事例K	1937年	木造	古民家型	○※産家個別の委託による醸造	○
事例L	1938年	木造	醸造場の増改築	×	○
事例M	1899年	RC造、 鉄骨造等	新築	×	○
事例N	1923年	RC造 鉄骨造	醸造所の増改築	×	○※現在は非公開
事例O	1877年	RC造、鉄骨造 木造	敷地移転	×	○

表 4 畑や生産空間と市街地空間の連続性

事例名	畑や集荷場への境界				アクセス確保の手段			
	道路①	道路②	ボリューム	水路	畑の看板	橋や道	ぶどう棚	見学案内 資料の展示
事例A	×	×	×	×	—	—	—	○
事例B	×	×	×	○	—	○	—	○
事例C	×	×	×	×	—	—	○	○
事例D	×	×	×	×	—	—	—	○
事例E	○	○	○	×	—	—	○	—
事例F	○	○	×	×	○	—	○	—
事例G	○	○	×	×	○	—	○	—
事例H	×	×	×	×	—	—	—	—
事例I	—	—	—	—	—	—	—	—
事例J	○	×	○	○	○	○	—	○
事例K	×	×	○	○	—	—	—	○
事例L	×	×	○	×	—	—	○	○
事例M	○	×	×	×	○	—	—	○
事例N	○	○	×	×	—	—	—	○
事例O	○	×	×	×	○	—	○	○

次にこれらの連続性を阻む境界に関して各ワイナリーがとっている畑や生産空間と地域をつなげる構築物について、現地調査を基に類型化を行った。その結果畑の看板、橋や道や、ぶどう棚（下部に侵入できる）の設置による物理的な連続性を確保する手段と、見学案内や資料の展示を通して情報の提示を行うための手段に大別できた。ただし事例によっては水路などのヴォイド空間を景観面の演出に使う事があり、その場合は視覚的な連続性が確保される。

表 3 と表 4 を照らし合わせると、これらの境界における各事例の応答の仕方は、共同醸造所に由来する手法を取るワイナリーとそれ以外のワイナリーで異なっていた。例としてワイナリーと畑を分断する水路などのヴォイドに対して、共同醸造所に近いワイナリーは工夫のほかに水路に対して複数の橋を設けることで対処されるが（事例 B）、事例 H では水路の向かい側に葡萄畑があるという立地を利用して、ワイナリーから見た風景の広がりを演出するために水路空間を利用して、周辺環境の利用の仕方に違いがみられる。見学案内による情報の展示は、葡萄畑や圧搾空間へのアクセスが設けられていないワイナリーに見られる。作業の空間とは別に見学空間が設定され、専用のスペースや資料館を設ける。

資料の展示は、3-1 で述べた道具類の展示物である。これらはワイナリーのファサードや看板に並置され、道に対するアイコンとなる。

表 3 と表 4 を照合すると共同醸造所に由来する生産手法から近代化を進めたワイナリーは、畑や生産空間と街空間の間に何らかの境界を設けている。近代化したワイナリーでは現在用いている機材や空間を公開しない場合でも過去の製造風景については積極的に公開し、来訪者に各ワイナリーの個性を伝える工夫がなされている。以上から共同醸造所に由来するワイナリーの近代化は地域との空間的な連続性を弱める方向に働いたが、反対に共同醸造所に由来する手法を続けているワイナリーでは現在でも地域との空間的な連続性を維持している。

またここまでの結果から、現在のワイナリーに関するヒトの連関は醸造家のワイン造りと地域のコミュニティとの関係の強さのバランスが影響している事が考えられる。その中でも特に地域との関係を重視するワイナリーでは、醸造家が周辺の景観を維持する中心の主体になっており、耕作放棄地となって荒れた周辺の葡萄農園を醸造家が中心に整備をすることで集落の景観維持を担っている。

ここまでの調査で行ったヒアリングを基にワイナリーに関する主体の変化を追うと、近代化以前と比べて関係する主体が多様化している。(図10) 醸造家だけでなく地域の図書館や資料館が本地域における産業の調査という形で連携し、先進技術を持つ大規模ワイナリーによる研究や育成が行われるようになったことで、移住者や周辺地域の住民がワイナリーと関わる機会が増えている。

以上から共同醸造所を由来とするワイナリーは地域外の人との関係を広める事例と地縁を重視した伝統的な事例が存在し、その関係の広がりや生産空間と市街地の空間の連続性に影響していると考えられる。

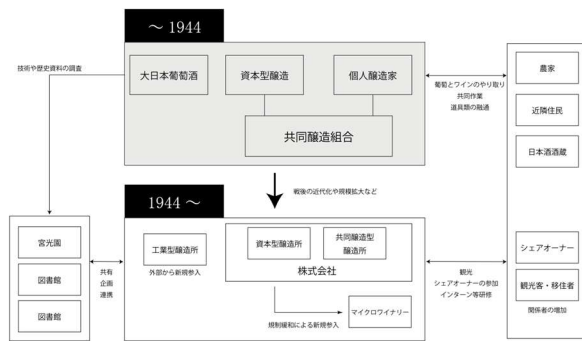


図10 共同醸造所に関する人的な連関

4 生産空間の発展と地域空間の関係性

K. リンチは『都市のイメージ』によると、都市空間の物理形状やその組み合わせが視覚的なイメージを形成し地域の形態を代表する景観を生み出す。3章での分析から、勝沼においてワイナリーの形成した空間およびその要素は本地域の農家、醸造家やその他の来訪者が集まって形成された空間であり、同時に地域の主要な通り道にそって連続する。したがって本地域では多数の共同醸造所が密集していたことから、この構成が集住空間内で反復されることによって、現在のワイナリーで見られる光景の原型となった可能性が高い。そこでワイナリーの敷地における生産空間と畑や周辺空間の地域との空間的な連続性の変化について分析するため、地域コモンズを内包するワイナリー空間の発展と地域空間の関係性を調査した。

4-1 ワイナリーの発展過程

枝川ら(2017)⁰の研究によると、1970年代にワインの生産者ロバート・モンダヴィが”ワイナリーのショーケース化”を提案することなどをきっかけとして、1970年以降のワイナリーでは醸造や貯蔵の空間、エントランスを一般に公開するものがみられる。これらの空間構成では生産の空間と公開する空間を組み合わせ、来訪者に施設全体を回遊させる。工業的生産を目的とした大規模な物やワインブーム等の社会現象を通じて生産量を拡大したワイナリーは、衛生等の観点から、エントランスと生産空間を明確に分ける。

一方で本地域のワイナリー建築の規模やファサードを観察すると、古民家を利用転換したもの、大規模化し新たに工場を新築したもの、小さな小屋を複数つなげることで増改築しているものなど建築の増改築の方法や建築の様式に差異がある。そこで小規模なワイナリーの建築に行われた増改築の手法に着目し、空間の発展経緯を調査した。分析には国土地理院の空中写真閲覧システムとgoogle mapで確認できる空中写真を用い、現地調査や及びインタビューにおいて増改築の具体的な経緯をヒアリングすることで、増棟や用途変更の様

子を時系列順に整理した。(図11)

その結果、各ワイナリーの増改築の過程は以下の3類型に分類できた。

4-1-1 増改築による形成

設立当時のコンクリート造建築や鉄骨造の建築物を現在も利用している醸造所では、建設当時の機能を残したまま周囲へ増改築をすることによって規模を拡大し、近代化のために必要な整備を行う。

基となる醸造機能の空間に連なる形で小屋が増築されている。

4-1-2 民家建築の用途転換による形成

古民家を利用した醸造所は、増改築の過程で木造民家を再利用し、新たにエントランスとなる空間を形成した建築が当てはまる。再利用に用いられる建築物は勝沼の外部から移築した、あるいは以前母屋として使われていたものが当てはまり、改修して転用される。特に祝村大道沿いは南部に河川が流れ、取水しやすかったことから養蚕に適する。その為ワイナリーの建築物も養蚕を行っていた民家となっており、全身の会社が転用している。付随する兼建築に関しても養蚕時代の転用であり、古民家の回収は最低限となっている。

4-1-3 敷地の移転と新築

この他の事例として、既存の醸造所の建築は残して用途転換し、離れた敷地で製造のための別棟を新築するケースがみられる。この場合既存の建物は資料展示室やエントランス、試飲など来訪者の空間として再利用される。これらの事例は戦前と戦後で生産量が大きく増加し、あるいは近代化に伴ってワインの生産方法を大きく変えている醸造所である。利用が終了した醸造所建築が残される場合は、資料館などに用途転換されるケースがみられる。建て替えによって規模が拡大した場合は、用途面で

表3による増改築形式と生産手法の照合では、増改築により発展する累計はすべて伝統的なワイン製造の手法を継承するワイナリーであることがわかる。また古民家型は祝村大道沿い、勝沼北部の小佐手、勝沼南部の藤井に属する4事例が該当する。また、老朽化や工場の移転に伴って主な醸造所の敷地を移転し、新築した事例が該当した。

4-2 発展に伴う余白空間の形成

各事例の正面からアプローチに当たる空間を比較すると、増改築型及び古民家型では事例で建築の接道面が敷地奥へセットバックされ、その結果余白空間が生じている。市の文化財課によれば、古民家を利用したワイナリーに関しては正面に富士山が来るよう配置されていることが明らかとなっているが、増改築型にセットバック空間が設けられる理由は明確に解明されていない。そこで伝統的なワイン生産との関係性を分析するため、増改築で形成されたワイナリーにおける余白空間の形成過程を調査した。その結果以下の3事例で具体的な増改築の過程が確認された。

事例Aでは昭和13年頃にコンクリートブロック造の小屋が建設されたが、醸造量の増加に対応して規模を拡大する際に現在のファサード側の棟が建造された。1940年代は軒先の屋外で行っていた圧搾作業が新設された半屋外で行われるようになり、保管する葡萄や完成品の増加に合わせて倉庫や瓶詰の空間が追加されることで現在の形となっている。

事例Bでは道沿いに立っていた母屋が建て替えの際に敷地奥へと移動し、同時に最初期のワイナリーの建物が増改築されることで醸造所前の広場空間が形成されている。1980年の段階で冷蔵庫や加工のための空間を増築しているが、その多くが広場に面する形で建造

されている。その後は竈などのワイン製造に直接関連しない設備が広場に追加され、さらに広場に隣接する葡萄畑の下にも新たな建造物（動物飼育のための小屋）が建造されることにより現在の形に至る。

事例Cは本地域で針金を用いたぶどう棚を開発した農家でもあり、甲州街道沿いで観光ぶどう園とワイナリーを兼業していた。そのため1975年頃には道沿いの民家を解体して敷地中央高さ葡萄畑兼駐車場と醸造場が併設されている。ぶどう棚の高さは2種類あり、敷地奥側は高さが約1.8m、敷地手前側が下部に観光バスの駐車場を兼ねるため高さが3~4mとなっている。その後は販売のための小屋がぶどう棚に隣接する形で増築された。近年になって醸造所真横に母屋のベランダを兼ねた半屋外空間が設置され、現在の形になっている。母屋は醸造所からぶどう棚を挟んだ向かい側に新築されており、葡萄棚は家の庭も兼ねている。

以上のヒアリングからは、各ワイナリーにおいてワインの製造手法が近代化するにしたがって建物が増築され、生産空間の拡張や販売・加工機能が追加されたことに加えて醸造家の居住や観光農園として来訪者の侵入できるぶどう棚、動物の飼育などワインの生産に直接関わらない設備が追加されていったことがわかる。

またこれらの事例を平面的に分析した結果、複数の機能が街路空間に接する位置に配置され、常に余白空間が形成された事が確認された。また屋外にあった圧搾の空間が半屋外空間へ移設された結果、軒先に複合機能を持つ空間が形成された。

これらを総合すると、余白空間の形成過程において共同醸造所に近い製造手法を採用し地域コミュニティとの関係が深いほど、ワイナリーの正面に余白空間が設けられ、その空間が農家、醸造家、地域住民など多様な人々の交流の場となる事が示唆される。

4-2 増改築によるワイナリーの発展と余白空間の関係性の分析

4-1で確認できた余白空間について、具体的な生産空間及び都市空間の関係性の関係性を明確にするため、圧搾空間と余白空間の位置関係に着目した。作業空間に属さない空間を把握するため、来訪者の導線と生産空間の位置関係を分析した。他の共同醸造所も含めた結果、以下3つの配置タイプが確認された。

外周配置型…来訪者用の正面玄関や醸造所が敷地外周に配置されることによりワイナリーの醸造機能にいたる空間が形成される。

ボリューム裏型…ワイナリーの建築物によって敷地を分断され、一般来訪者の訪れる空間とは別に醸造のための空間が設けられる。通路型…搬入専用の開口部を持ち、来訪者の導線から分岐する事で醸造に必要な空間が確保される。

ボリューム裏型ではアプローチで圧搾の生産空間が確認できず、見るためには導線を外れて敷地奥へ進む、あるいは専用の見学路を通る必要がある。対して外周配置型ではエントランス空間が栽培や圧搾の空間を兼ねるため、生産空間の様子が外部から確認できる。通路型ではエントランスと生産空間の間に一定の距離が存在する。

したがって増改築により設立当初の作業空間を拡大したワイナリーでは、アプローチ空間やエントランスが圧搾や栽培の空間を兼ねる傾向があり、これが母屋や周辺施設の一部として活用されることにより多機能化が進むことが確認される。（写真5）。

4-3 余白空間における利用者の振る舞いと多機能化

活動が行われる余白空間の性質を把握するため、仕込み作業と平常時で外部から確認できる活動の実態について調査した。事例Bは今日でも人力圧搾の手法を利用した醸造を行っており、周辺地域との結びつきが特に強いワイナリーのひとつとされる。そこで事例Bを主な調査対象とし、地域住民がワイナリーの空間を共有する際の具空間利用に着目して、そこでの人々の行動を調査した。仕込み時期と平常時の差異を確認するため、各場面における現地調査と地域住民へのインタビュー結果を整理した。

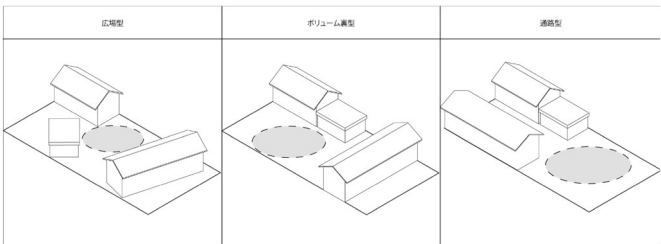


図12 一般の導線と圧搾所の位置関係

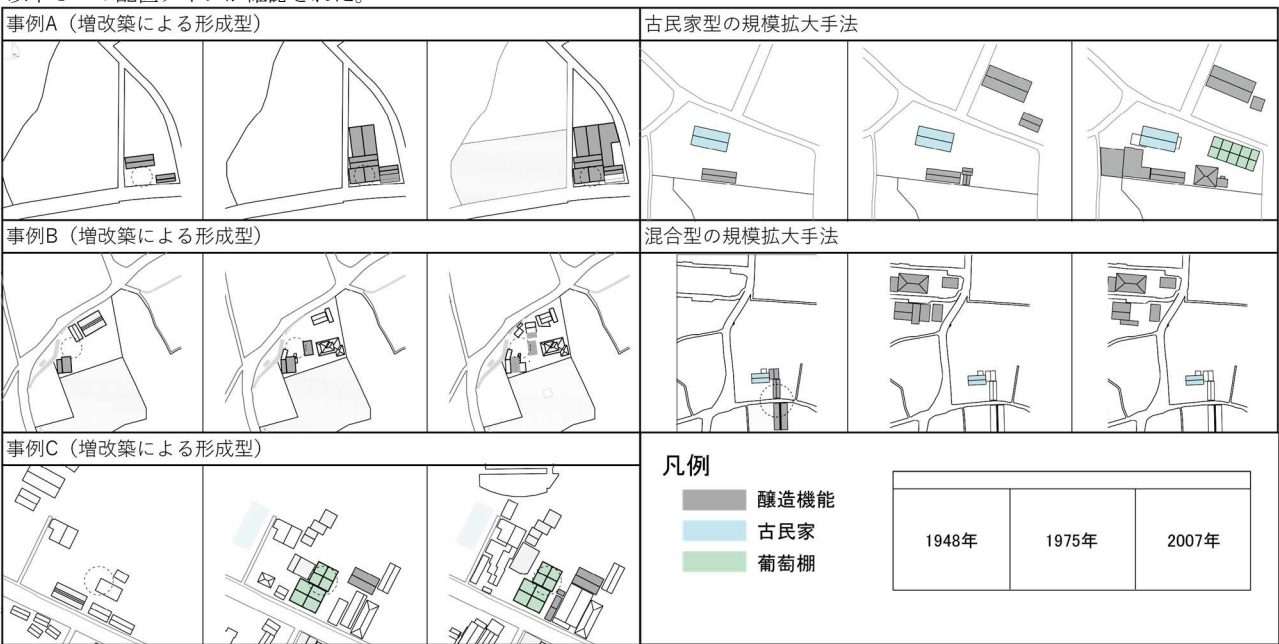


図11 小規模ワイナリーの発展経緯

4-3-1 共同作業における仕込みの空間としての用途

事例 B での圧搾作業には中心となる醸造家や近隣の農家に加え、観光客、甲州市内の他地域から定期的に参加する醸造家の知人、農学部をはじめとしてワイナリーに関する研究を行う学生、葡萄畑をシェアする形で借りている関東在住の家族連れ等が参加した。

本事例の仕込み作業では醸造所の建築内で葡萄果実をローラーにかけて果皮を割り、茎などの不要な部分を取り除く作業（除梗）、果実に圧力をかけることで果汁を得る作業、タンクに果汁を送ったのち熟成する作業、瓶詰めする作業が行われる。葡萄が最初に持ち込まれる除梗の段階では、周辺の農家が果実を運搬して破砕用のローラーにかける。その場で葡萄の品種やその品質等について話し合う事が多く、作業場の周辺の段差などに座りながら話す行為が観察できる。農家にとっては互いの作物の出来について情報交換する場を兼ねている場でもあり、3~4 人が常に滞在する。

ローラーで除梗した果実は地下へ移され、醸造所の壁にかけられた横穴から圧搾のための器具に送られる。その際重力によって自然に流出した果汁は別の容器に移されてそのまま醸造される。この際、醸造家が地域の人へ果汁をふるまうことがある。

人力の圧搾では2~3 回に分けて圧力をかける場合もあるため、一般的な機械式と比べると圧搾作業の回数が増える。そのため、醸造所前で待機する人々と時折交代しながら作業が進められ、農家も含めたほぼ全員が作業に参加していた。醸造家や長年圧搾作業を行っている人々は作業を通してワインに用いる葡萄の品種などを確認し、今後製造するワインについて確認し、議論していた。醸造所の軒先には焚火や机が設置され、休憩中の参加者が情報交換や親交を深める場となっていた。家族連れの参加者の子供や農家なども同席し、醸造の様子を観察していた。

またインターン生や見学者と醸造家が会話し、ワイン製造の技術や葡萄の品種について情報共有する場面が観察された。また同様の情報交換として、地域で育てられた葡萄を並べて農家や地域の住民が互いの葡萄の出来を確認しあう場面が見受けられた。

以上から仕込み時の醸造所は単なる機能的空間にとどまらず、情報交換や交流の場としても機能しており、外部の来訪者と醸造家をはじめとする関係者が流動的に滞在する空間であらう。

4-3-2 地域の共有空間としての用途

本事例では醸造所に多数の増改築が行われており、圧搾の時期に限らず地域の住民や来訪者が訪れる場である。南に広がる屋根付き葡萄棚はシェア畑となっており、常時解放される。また棚下の空間に小屋が設置されヤギの飼育がおこなわれる他広場で犬の散歩がみられる。ヤギの飼育によって雑草を取り除き土の状態をよくすることが期待できる⁰が、葡萄畑内部をヤギ散歩する光景は周辺の道からも確認でき、ワイナリーが地域とつながるための媒体として機能している。広場を囲う形で増築された建築物は本ワイナリーにおけるワイン造りを体験する学習施設や葡萄の加工施設となっているが、これらは仕込み作業の際には休憩所として開放される他、年末年始の行事や広場に設置された竈を用いる企画の準備を行う場となり、その際は醸造家以外の地域住民が集まる。

4-3-3 来訪者向けの用途

共同醸造所のワイン製造量は比較的小さいため、販売や飲食を目的とした来訪者のための空間は規模が限定される傾向がみられる。

本事例では、敷地北に設置された加工場や倉庫に併設される形で来訪者向けの空間は設けている。販売店舗前のスペースは駐車場としての機能に加えて母屋へのアプローチとしても利用されている。近隣住民や知人が立ち寄ることから、子の空間は販売のための空間としてではなく地域の住民に対し対面で販売や交流を行うための空間として機能している。

また、近年はブドウ畑を来訪者のシェアする空間として貸しだし、醸造家が管理する手法が採用されている。葡萄を借りているのは関東に在住する人々が中心であり、いつでも農園を訪れてブドウの栽培やブドウ狩りを体験する事ができる。現地調査の際にはシェアした家族が仕込みに参加する様子も見受けられ、本事例で葡萄畑をシェアする目的の一つに仕込み作業への参加を挙げる。

4-4 ワイン生産活動の祝祭性

このような用途がなされる要因について、圧搾作業に参加した人や地域のインタビューではワインが生産される空間を地域における生活の節目と捉えている事が示唆された。一般的な葡萄農家における農業の年間サイクルによれば9 月から10 月にかけての仕込みは当然収穫の時期に重なり、休閑期の始まりとなる。そのため地域の農家が一息付く前の作業として近隣農家が集まり、ワインの仕込みに参加するといわれている。各ワイナリーで展開される各生産工程と地域の農家が集まる空間は小地形を用いた段差や軒先に設けられた半屋外空間の机、ぶどう棚の下に設けられた作業空間で展開される。

また同インタビューでは、仕込みに用いる道具の使い方にも言及があった。圧搾の作業に用いる道具は設立時に大工によって作られた本事例独自の物であるが、圧搾後の搾りかすの入れ替えや清掃がしやすいように他の事例よりも大きくつくられ、場合によっては人が上に立って圧力をかける。このような道具の使用方法的差異が勝沼地域の仕込み作業を位置行事として印象付けている。

また、近年はブドウ畑を来訪者のシェアする空間として貸しだし、醸造家が管理する手法もみられる。葡萄を借りているのは関東に在住する人々が中心であり、借りた人々はいつでも農園を訪れてブドウの栽培やブドウ狩りを体験する事ができる。現地調査の際にはシェアした家族が仕込みに参加する様子も見受けられ、本事例で葡萄畑をシェアする目的の一つに仕込み作業への参加を挙げた。

以上から本ワイナリーにおける空間の用途は、一般的なワイン生産が主目的のワイナリーと比較して地域の人との交流や年間行事などの地域活動の割合が高く、多様な活動が展開される場であることが示されている。

4-5 本章のまとめ

4 章ではまず各ワイナリーの空間構成に注目し、生産に用いられる空間と余白空間を明確に区別して検討した。当時の醸造所建築に新たなボリュームを加えることで発展したワイナリーの経緯を検討した結果、アプローチ空間が敷地内で余白として残されることが明らかとなった。仕込みの時期における空間の用途を調査した結果、余白となる空間は仕込み作業に参加する人々の集まる場として活用されることが分かった。また、平常時にも醸造所周辺の空間は開放されており、年間行事をはじめとする地域イベントの際には周辺施設と共に屋外空間として積極的に活用される。農家はこれらの空間が活用されることをブドウ栽培の1 年を締めくくる場として認識し、来訪者との歓談を通じた交流が行われる。

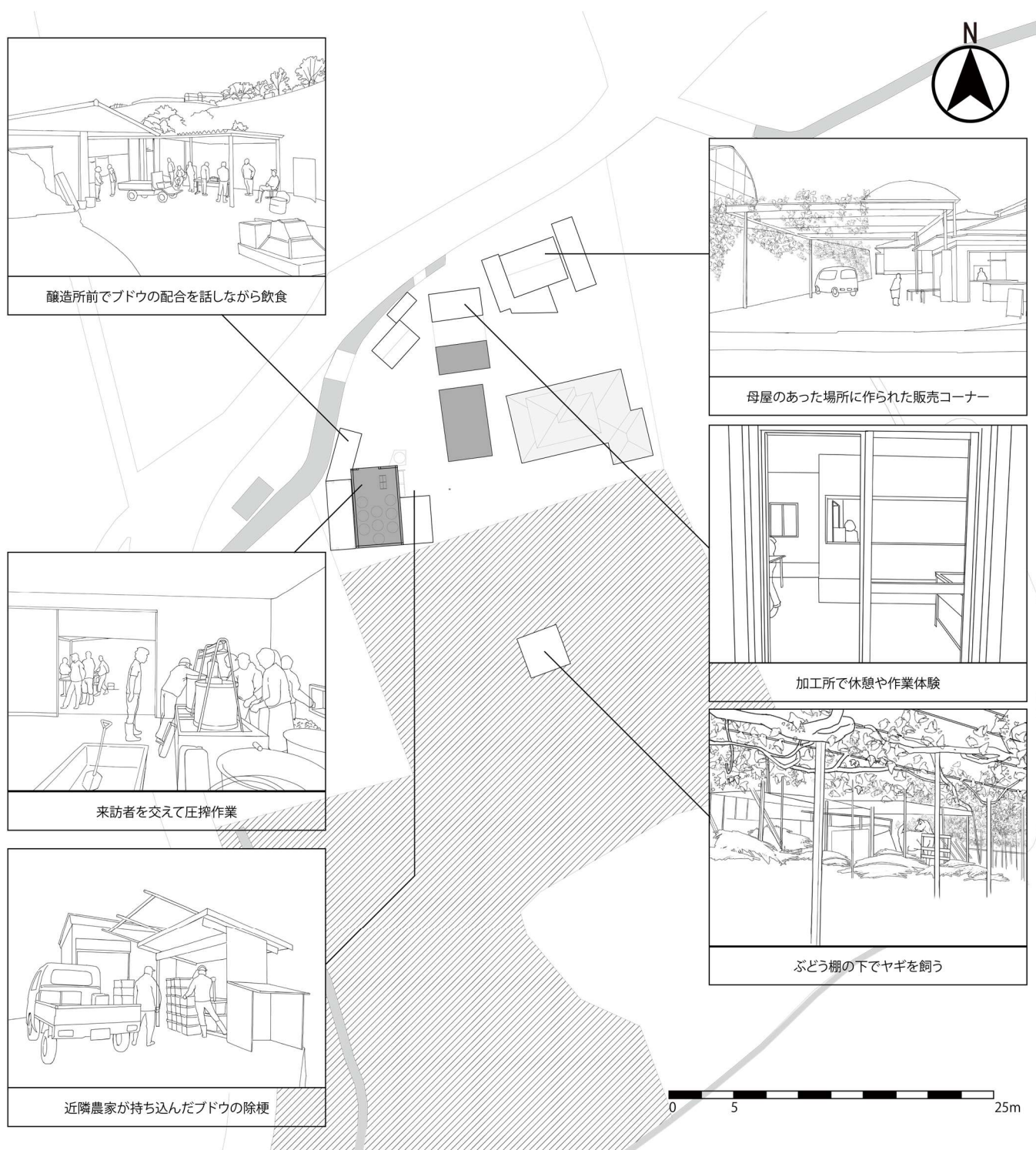


図 1 3 ワイナリー生産空間や余白空間における人々の行動

このように本地域の共同醸造所に由来するワイナリーの空間構成は仕込み作業の有無にかかわらず共同体が共有される空間として機能し、現在でも地域共同体の資源としての性質を保持している。

また近年は畑のシェアリングシステムをはじめとする仕組みが整備され来訪者はいつでも農園を訪れる事ができ、地元農家だけでなく遠方からの来訪者とも交流する場として機能する。したがって、共同醸造所に由来するワイナリーは地域の結節点としての役割を果たしていたと考えられる。

5 現代ワイナリーにおける共有空間の継承

これまでの分析から、本地域のワイナリー空間が空間との連続性の中で形成されたことが明らかになった。一方で近年では2003年に定められたワイン特区制度をはじめとする政策が行われたことで新規参入のハードルが下がり、新たな中小規模ワイナリーが設立された。そこで今日のワイナリー群における共有空間の用途に着目し、現代における地域の街路空間と共有空間の関係性を調査する。

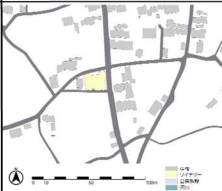
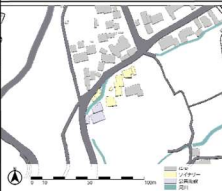
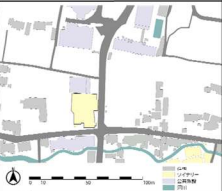
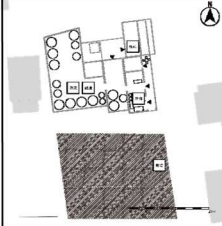
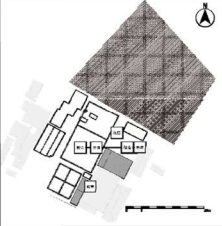
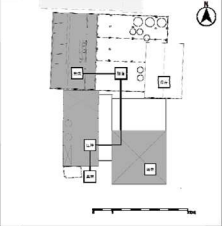
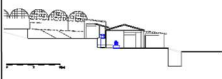
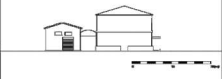
	事例A	事例B	事例C	事例D
醸造施設の外観				
周辺農家の葡萄を用いたワイン生産	△（一部委託）	○	△（一部委託）	○
周辺の環境				
公開されている古道具類や作業空間	ホーロータンク 木製樽 等	葡萄棚 ホーロータンク 垂直式圧搾機 破砕機 等	葡萄棚 ホーロータンク 木製樽 等	木製樽 ホーロー製タンク 醸造用土蔵 等
規模拡大の手法	醸造所の増改築	醸造所の増改築	醸造所の増改築 →醸造所の新築	醸造所の増改築
作業空間と余白空間の平面配置				
地域コモンズに関わる空間の用途	地域住民に対する販売 仕込みの際の集荷場 半屋外のテラス席 等	仕込みの際の集荷場 農家同士の交流 ヤギの飼育、動物の散歩等	仕込みの際の集荷場 観光農園のエントランス 自家用干し柿の製造 等	仕込みの際の集荷場 来訪者の見学空間 等
ワイナリー接道面の立面				

表5 共同醸造所に近い生産手法を持つワイナリーが地域コモンズに与える影響

【注釈】

1) 木下(2012)は、「都市の持続可能性とも密接に絡んで、環境や社会、そして経済の持続可能性にアイデンティティは大きく貢献するものである」とし、「一人ひとりの人間の主体性に戻り、場所と時間が統合された存在のしあわせを感じられる都市空間をいかに形成していくことができるか、それが持続可能性につながるアイデンティティ表出の手段となるであろう」と述べている。(参考文献1)

2) 陣内(2023)は、『地形・土壌などの土地の持つ自然条件や、景観や歴史、産業や文化を背景とした地域共同体との関わりも深い』いものとしてイタリアの「テリトリー」という概念、そして「文化的景観」の概念を挙げ、『これらの概念が社会が共有することで、地域はプライドを持った自治を可能にする』と述べている。

【参考文献】

- (1) 木下勇・ハンス・ビンガー・岡部明子(2012)『アイデンティティと持続可能性～「縮小」時代の再開発の方向～』萌文社、p189, p178, p179
- (2) 広井良典(2011)『創造的福祉社会-「成長」後の社会構造と人間・地域・価値』筑摩書房
- (3) 間宮陽介、廣川祐司(2013)『コモンズと公共空間：都市と農漁村の再生に向けて』、昭

(4) 木村亜維子(2014)『人びとの記憶から読み解くアイデンティティを育むコミュニティ醸成空間としてのコモンに関する研究-阿佐ヶ谷住宅における“市民の庭”としてのコモンを事例として-』日本都市計画学会都市計画論文集 Vol149, No3, p681-686

(5) 寺田真理子、霜田亮祐、佐藤敬『域コモンズとしての「都市の庭」を介した集住環境の再編に関する研究』住総研 研究論文集・実践研究報告集 No.50, 2023 年版

(6) 広井良典(2017)『コミュニティとしての都市-家族・地域コミュニティの変容とこれからの都市自治体政策の在り方-』都市とガバナンス Vol27, P3-P11

(7) 沼尾航平『アート・イン・レジデンス事業がアーティストと周辺地域に与える影響についての研究-初黄・日ノ出町地区と黄金町 AIR を事例として-』国際・都市社会文化研究 2023, P198-P202

(8) 寺田徹、雨宮護、細江まゆみ、横張真、浅見康司『暫定利用を前提とした緑地の管理・運営スキームに関する研究』ランドスケープ研究 Vol175, No.5, P651-P654

(9) 赤松加寿枝、中川理『テロワール ワインと茶をめぐる歴史、空間、流通』昭和堂、2023

甲州市・甲州市教育委員会(2019)『勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観調査報告書』甲州市

(10)河崎篤史『歴史的市街地における文化的景観の形成過程と住空間の応答』東京大学大学院、都市工学専 2021 年度修士論文梗概集

(11)甲州市・甲州市教育委員会(2019)『勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観調査報告書』甲州市

(12)菊池淑人『葡萄栽培に関する景観に対する地域住民の認識-山梨県甲州市勝沼地域を対象として』日本都市計画学会都市計画報告集 No. 21, 2023

(13) 鈴木富之、山本圭太、山崎京子、呉羽正昭(2007)『甲州市勝沼町における観光ブドウ園とワイナリーの地域的特徴』地域研究年報、第 29 巻、p63-p79

(14)甲州市役所都市整備課(2019)『甲州市景観街づくりヒント集』、甲州市

(15)勝沼町誌刊行委員会(1962)『勝沼町誌』勝沼町

(16)菊池俊夫(1983)『甲府盆地におけるワインの生産形態と生産組織』経済地理学年報 第 29 巻, 第 2 号, p88-p105

(17)正田智樹『フードスケープ 図解 食が作る建築と風景』学芸出版社、2023

(18)勝沼町『写真で見ると勝沼』勝沼町、1998

(19)ケヴィン・リンチ『都市のイメージ』岩波文庫、1960

(20) 枝川和樹、中井邦夫、鈴木成也『公開性のあるワイナリーにおける各室の特徴とつながり方からみた空間構成』-日本建築学会学術講演梗概集 2017, P553-554

(21) 近藤康二(2022)『ぶどう畑に羊を導入し「サステナビリティ」を实践-現存する日本最古のワイナリー・まるき葡萄酒(株)の取り組み』シーブジャパン No. 1